

ました。でも、もう駄目。日本に少しでも近づき死ねたら……」と言われ
ても、何もしてあげることができま
せんでした。

やっこの思いで京城に着きまし
た。何百人の人で、駅はごった返し
ていました。会社の人たちとは、こ
こで一生の別れとなりました。

長女の髪を元に直し、娘の姿に戻
してやりました。空になったリュッ
クを捨てようとしたが、「ここまで、
皆を守ってくれたのだから持って帰
りましょう」と、一つにまとめて主
人が背負い、その上に娘を乗せ、ま
たはぐれないよう全員ロープで結ん
でいました。

一人のアメリカ兵が近づき、娘の
手に何かを握らせました。娘のほお
を優しくなでながら、主人と何か話
しています。私も娘も、言葉が分か

らず、頭を下げるだけでした。

送還用の貨車の扉が締まるまで、
何か言って手を振っておられまし
た。主人に何を話していたのか尋ね
ました。

「自分にも本国に十六歳の娘がお
り、思い出して思わず手を出した。
こんなことなら、たくさんキャンデ
イーを持ってくればよかった。少し
だけど、仲良く食べなさい。元気で
ね」と言っていたとのこと。

貨車の中は、何事もなかったよう
に疲れて寝入っています。貨車が止
まり、主人が外をのぞき「釜山だ」。
京城から釜山まで寝てしまっていた
のです。

大きなお寺に連れて行かれ、おか
ゆをもらいました。目の前に大きな
船が停泊していました。「あれに乗
るのかな」と思っていたら、また、

貨車に乗せられ木浦（モッポ）に連
れて行かれました。

アメリカの大きな船に乗船し、よ
うやく帰国の途につくことができま
した。

出航して、しばらくして周辺が
騒々しいので、近くの人に「何かあ
ったのですか」と聞くと、「青年が
死んだので、水葬にする」とのこと。
皆が甲板に上がり見送りました。船
は、三回汽笛を鳴らし、遺体のまわ
りをひと回りしました。

私のような弱い者が生き残り、若
い人が死んだのが辛く泣きました。
どうか、よい所へ行ってくださいと
祈らずにはいられませんでした。

船内におりると、二人の女の人が
泣いていました。「どうしたのです
か」と聞くと「自分の罪の重さにお
見送り出来ませんでした」と、また